リカード価値論の1批判

—— *"Observations on Certain Verbal Disputes…"* (1821) によせて——

種　瀬　茂

I

1820年代はリカードの理論をめぐる激しい論戦によってしられている。論争の焦点はリカードの経済学における困難な問題点で，つぎの2点にあった。すなわち第1は剰余価値源泉の解明である。リカードは投下労働をもって商品価値の実体とみなしその量をもって価値の大いさを測ることを事実上把握していた。しかしその労働そのものをより以上深く分析せずたんに労働は価値の尺度となるとしていた。ところが資本との交換では生きた労働は対象化された労働よりも少い価値しかないということになる。生きた労働の価値すなわち労賃はそれによって生み出される生産物の価値よりも小さい。このような問題は商品としての労働力の把握によってはじめて解決せられる。論点の第2は利潤率均等化の問題である。資本が不等量の生きた労働を働らかせるならば，他の事情を一定とすると，不等量の剰余価値を生み出すこととなる。しかるに現実はその反対であって同等の資本は同じ時間内に平均的に同等の利潤を生産する。価値法則にもとづき剰余価値の利潤への転化を解明することによって解決しうる問題である[1]。

以上のようなリカード理論の難問をめぐるリカード擁護派と反対派の論争は経済学の領域での科学的躍動を示すと同時にリカード理論の俗流化と普及を示している[2]。その花々しい論戦の中でサムエル・ベイリー (Samuel Bailey, 1791—1870) はリカード反対派として独自の位置を占めている。かれはリカード理論の欠陥をつき，商品の価値はその生産に必要な労働量によって決定されるというリカード理論の根底を破壊しようとする。ベイリーはその場合価値の現象形態たる交換価値にどこまでも執着し，ここにのみ価値概念を極限してゆくのである。リカードが価値形態の問題を不問にふした限りこのベイリーの非難を生ぜしめることとなった。そこでベイリーは不変の価値尺度を排除し価値尺度としての貨幣の機能を解明しえた。この点にかれの理論の特徴と1つの功績がみられる[3]。

本稿においてとりあげる1匿名の著作『経済学におけるある種の用語論争に関する諸考察，とくに価値および需要供給に関連して[4]』はいちはやく1821年にあらわれ，リカード理論をめぐる論戦のはじまりを告げるパンフレットの1つである[5]。筆者は不明であるが，その内容はベイリーの主著(1825年)[6]に示されるものを明確にふくんでおり，そこでこの匿名者もベイリー自身であろ

1) F. Engels, Vorwort zur Marx' *Das Kapital*, Bd. 2. Berlin, Dietz Verlag. ss. 18—19.

2) K. Marx, Nachwort zur zweiten Auflage *Des Kapitals*. Bd. 1. Berlin, Dietz Verlag. s. 12.

3) K. Marx. *Theorien über den Mehrwert*, Teil 3. Berlin 1962. ss. 131, 137.

4) *Observations on Certain Verbal Disputes in Political Economy, particularly relating to Value, and to Demand and Supply*. London, R. Hunter, St. Paul's Churchyard., 1821. 84 p. 以下『諸考察』と略称する。

5) リカードはいちはやくこの小冊子をしり，それをトラウア (H. Trower) との議論において批評している。1821年8月22日付トラウアあての手紙を参照。

6) S. Bailey, *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value*. [London, 1825. xxviii, 255 p.,] reprinted by London School of Economics and Political Science. London 1931. 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判』1946。原著の出版社は『諸考察』と同じ R. Hunter である。

うとの推定がなされるほどであるが，確定されてはいない。トリストラム・シャンディ(Tristram Shandy)[7]からの句をもって巻頭をかざり，ギリシァ，ラテンの慣用語をちりばめ，アリストテレスからベイコン，ニュートン，ロックなど多くの哲学者や自然科学者に言及しつつ議論を展開するスタイルは当時の知識人の1つの姿をつたえているとともに，その懐疑論は1理論の崩壊の先きぶれであり，無思想にして無節操な家庭用にふさわしい折衷論の先駆者[8]とよばれるにふさわしい。

全体は84ページ，そのうち大部分(1—59ページ)が表題にある価値に関する問題をとりあつかい，残り(60—84ページ)で需給論がとりあげられる。ベイリーの主著のごとく章別に整理されて議論が展開せられてはおらず，リカード，セー，マルサスによって当時刊行せられた主要著作の議論をつぎつぎにとりあげて批評しさるという方法をとっているため全体としての理論の展開過程をたどることは困難である。このようなスタイルはベイリーにはふさわしくないという点から，この筆者はベイリーではないとみる見解も生じているほどである[9]。

本稿はこの匿名著作をリカード理論をめぐる論戦でのベイリーの理論の1先駆という位置におき，ベイリー理論と対比してみたときどのような意義をもつかを考察することが目的である。そのために，まずベイリー理論の特徴たる交換価値分析がこの『諸考察』にはどのように示されているかをあきらかにすることが必要である。この点はすでに多くの論者によって解明せられており，ベイリー理論の主点がすでにこの『諸考察』において言葉も論点もよく似てあらわれているのである。そこでつぎに問題となるのは『諸考察』とベイリーの理論との差異である。ベイリーの主著(255ページ)と比べてはこの『諸考察』の内容は十分に論じつくされない点が多いことも当然であろう。しかしほとんどの主要点において先駆的な萠芽的な言及がなされていることはあきらかである。問題はこのように未成熟か成熟かの対比のほかに，『諸考察』の示している独自のものは何かという点である。それがどのようにベイリーの理論に受けとられたか，また受けとられないで別の方向への展開を示すようになったであろうか。これが本稿の第2の問題である。

II

『諸考察』は価値という言葉の内容をまず2つに分ける。第1は通常「公共の富」「諸国民の富」「富(riches)」とよばれる場合に用いられるもので，それは物の「価値」であって「物のかさや量」ではない。これは物の使用価値を意味している。第2の用法は財貨・労働・土地の価格を意味している。この価格は通常それらとひきかえに与えられる貨幣を意味している。すなわちスミス(Adam Smith)いのう名目価格(nominal price)である。これに対して真実価格(real price)がある。この真実価格は価値(value)ともよばれるが，これは何であろうか。そこで『諸考察』は価値の分析にはいりこむ。(7—8ページ)[10]。注目すべきはこの真実価値はいぜんとして交換価値(exchangable value)であるという点である。そこでつぎのように問題が提起される。「1つの物の貨幣価格(money price)はその真実価格，あるいは真実価値，あるいはその真実価値の指標(its real price, or its real value, or the sign of its real value)ではないといわれる場合がある。その物が貨幣と交換される率がことなる(ある別の時かところにおいて)にもかかわらず，ある種の別の**諸物**と交換される率は同じであるという場合である(逆の場合は逆)。そこで問題はつぎの通りである。すなわち，その物はこの場合**同じ**率で交換されるのであるが，その真実価格あるいは価値が同等であるというこの物と交換される別の諸物とは何で**あるか**，という問題である。」(7ページ)。そしてこれについてさまざまの答えがあるとし，労働，いっしょにしたすべての物あるいはそれらの平均，さらに

7) Lawrence Sterne の小説(1759—67)。
8) K. Marx, *Theorien*, Teil 3. s. 107.
9) R. M. Rauner, *Samuel Bailey and the Classical Theory of Value*. London 1961. p. 89.
10) 『諸考察』のページ数を示す。以下同様である。

その見本としての穀物，投下労働，支配労働が列挙される。そして「われわれがある物の価格あるいは価値について語るときにはいつも，**どんな**他の物あるいは諸物に対してその交換……がなされていると考えているかを明確にしておく労を惜んではならない」(8ページ)と注意される。『諸考察』はつづいてここに列挙せられた諸物が真実価格を示す基準となる交換の相手たりえないということを1つ1つ考察してゆくこととなる。その分析の中で注目すべき特徴はつぎの2点であって，いずれものちにベイリーの理論の基本的特徴となったものである。

第1は『諸考察』が価値概念をまったく価値形態(交換価値)においてのみ把えている点で，ここからスミス，マルサスの支配労働説も，リカードの投下労働説もともに批判されるのである。すなわち，ある物が支配する労働をもって価値の基準とするならばその労働そのものが価値をもつことはどう理解するのか(8ページ，51ページ)。また諸物全体をとって価値の尺度としても同じく困難である。諸物のあるものではかった価値は不変であったのに他の諸物ではかった価値は変化したとすると，どの諸物をとればよいのか。たぶん大多数をとればよい。だがどれが大多数かをきめるのは容易ではない。「これこそがとくにわたくしをつぎのような考えにみちびいた主たるものである。すなわち，1物の価値あるいは価格という語は，このように絶対的に，つまり問題になっている当の物が交換されるべき相手としてあなたが考えている物は何であるかを明確にしないで，この語が用いられると，それは何ら明確な意味をもたない，と。」(9ページ)。すなわちつねに価値は相対的にあらわされるものなのである。「財貨 A の価値の騰貴は，財貨 B, C 等において測られた価値，すなわち財貨 B, C 等に対する交換価値を意味するにすぎない。それは財貨 B, C の A に対する交換価値の下落を意味する。反作用は作用にひとしいのである。」(16ページ)。

第2に注目すべき点は価値の尺度と価値の原因についての『諸考察』の分析である。この点についてはリカードの投下労働説批判がなされる。リカードの主張するように「その財貨を生産する労働の量の増加がその財貨の価値を高める。そうであるとしよう。だがこれは何を意味するのか。その財貨が以前交換されたのとは異なる率で交換される，ということを意味するにすぎない。その他の物はちょうど同じにその価値が低下したといわれる。意味するところはそれらの間の**関係**(relation)の1変化にほかならないのである。」(12ページ)。そこで「リカード氏のいうように，2財貨を生産する労働の相対量(comparative quantities of labour)がこれら2財貨が相互に交換される比率の原因である，すなわち各財貨の他の財貨との関係において把握される交換価値の原因であるということは，——**各財貨の交換価値は**，他の財貨と関連なしに，つまり何ら他の財貨の存在に関連なしに，その財貨を生産した労働の量を意味するというのとはまったく異なるのである。」(13ページ)として，価値の規定と価値尺度の規定とを混同するリカードへの批判がなされる。

これに関連してリカードは相対価値を研究している[11]ところにかれの「論理の美しさ」があるのだと高く評価しつつも(15ページ)，しばしばかれが「あたかも相対的ならざる交換価値のごとき物があると考えているかのごとくであり，」(10ページ)このようなリカード本来の問題たる絶対価値(absolute price)はきびしく批判される。たとえばリカードは「財貨の全体の価値[12]」についてのべているのに対して，「財貨全体に対して価値は適用できない。財貨はそれらの間では相互に比較されて価値が変動しうる，だが財貨全体は価値変動などしえない。」なぜならそもそも価値は相対的であるからなのである。「だがそれ自身価値をもたない物が価値をどうやってはかることができるのか。まったく簡単である。もしあなたが価値の**意味**するところをほんのちょっと考えてみるならば。」として交換における内在的本質的な共

11) D. Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation. *The works and Correspondence of David Ricardo*, ed. by P. Sraffa, vol. 1. Cambridge 1951, p. 21.

12) Ricardo, *ibid.*, p. 274.

通者はまったく排除される。そしてこのような疑問を起すのは，長さや量の測定を念頭におき価値という語の意味について心をとざしてしまうことによるのであるとして価値尺度の独特の意味を強調し，さらに，リカードは「不変の価値尺度[13]」というとき，だからそれは「同等の交換価値」ということを意味し，そこで「どんな他の物との交換であるか」の問題が生じ，かくてそれは「財貨全体との交換」でもありえず「労働との交換」でもありえない，ということになり，ここに「不変の価値尺度」が排除されるにいたるのである(19～20ページ)。

以上の点にみられる『諸考察』の観点と理論内容は，交換価値という形態にのみ価値概念を解消し，それをたんに量的比率において把え，そして不変の価値尺度批判にいたっている。これらの点こそは周知のようにベイリーの理論の核心的部分をなすものである。もちろん『諸考察』はベイリーの主著にみられるように展開されて説明されてはいない点が多い。とくに価値尺度機能をはたす第3の商品についてなどは一言の言及があるのみにとどまっていたり(53ページ)，貨幣の価値尺度機能についても言及されるにとどまって深い追及は示されていない。(49ページ)。しかし前述のようにベイリーの理論の多くの特徴がある場合には言葉通り示されているのであって[14]，その意味では『諸考察』は重要な先駆的業蹟であったことはあきらかである。

さらにこの点は『諸考察』の後半における需要供給論においても同様である。ここではマルサスの需給論(『経済学原理』初版1819年[15]，第2章第2節第3節)を詳細に批判しつつ生産費(自然価格)論をリカード，スミスによって展開している。その内容はベイリーの主著第11章にみられるものと同じくリカードの自然価格論を基礎としているのである。すなわち，市場価格が自然価格に帰結するということはスミスとリカードによって示された見解であり，次のようにのべられている。「1財の生産に必要な賃銀・資本および土地の量が従来にくらべて変化した場合，スミスがそれの自然価格とよぶものも変化するのであり，以前には自然価格であった価格がこの変化に関連してその財の市場価格となる。なぜなら供給も需要量も変化しなかったかもしれないが……，右の供給は，現に生産費をあらわすものを支払いうるしまた支払うつもりの人々の需要にちょうど正確に照応せず，むしろ過大または過少であり，かくして供給と需要，新たな生産費に関連して有効需要たるものとの間の比率が，従来のそれと相異っている。この場合，何の障害も起らないならば，供給の変動が生じ，ついに，商品がその新たな自然価格にもたらされるであろう。」(60～61ページ)[16]。

III

以上のような先駆的意義をもつ『諸考察』をベイリーの主著と対比してみるとき，その独自の特色は何であろうか。これが第2の問題である。以下それを2点にまとめて解明しよう。

第1は価値と富の区別についての『諸考察』の分析に関してである。その基本的立場は有名な「価値は物の属性であって，富は人間の属性である。価値は，この意味で，必然的に交換を含むが，富は含まない」(16ページ)という言葉で表わされる物神崇拝の観点に立っている[17]。この点はベイリーによってほとんど言葉通りにくりかえされている[18]。『諸考察』のこの立場はリカードの見解「価値は富とは本質的にことなる」[19]を俗流的に表現したものである。そこで『諸考察』はこのリカードの見解に依拠して，セーとマルサスの富に

13) *Ibid.*, pp. 17, 43, 275.

14) K. Marx, *Theorien*, Teil 3. ss. 143, 144, 163,

15) Th. R. Malthus, *Principles of Political Economy*. London 1820. 吉田秀夫訳『経済学原理』上下2巻，岩波文庫。

16) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 3. Berlin, Dietz Verlag. ss. 217—218. 註31を参照。「生産費の変動が需要供給の比率によって調整されるのではけっしてなく，逆にそれ自らがこの比率を調整する」という見解を『諸考察』はマルサスに反対しつつ示そうとしているのである。

17) K. Marx, *Das Kapital*. Bd. 1. ss. 88—89, K. Marx, *Theorien*. Teil 3. s. 127.

18) S. Bailey, *op. cit.*, p. 165. 邦訳151ページ。

19) D. Ricardo, *op. cit.*, p. 273.

ついての見解を批判するのである。その批判の対象はセーについては『マルサス氏への手紙』(とくに第1と第5),それに関連した『経済学概論』であり,これについてはリカードの『原理』第20章におけるセー批判がうけつがれており，マルサスについては『経済学原理』初版第1章第6章が対象とされる。

とくにここで注目すべき点は使用価値あるいは効用についての『諸考察』の批判である。たとえばセーの効用(utilité)の等一すなわち等価の存在[20]について批判しつぎのようにのべる。「セー氏が効用は他の効用に等しいというとき意味するのはたんにつぎのことを意味するにすぎない。すなわち，われわれは人類によって1物に付与した**平均的**あるいは**一般的**価値を心にとめておかねばならないのであって，ある1個人がそれに付与した特殊の価値を心にとめるべきではない，と。」(37ページ)。そしてこの意味で効用は認められた価値(valeur reconnué)[21]とされているのである。それはスミスやリカードのように使用価値(value in use)というのと同じである。そしてそれは交換と対比される物の質であって，desierableness というのが適当であり，それは交換価値ではありえない，と批判するのである。(49ページ)。

マルサスの使用価値論に対しても同様にきびしく批判がなされる。(49ページ)。そして「価値をそれ自身で考察された特定の物にそなわるある性質であるとするから困難におちいるのである。価値の意味するところは1物がなんらかの他物と交換されるということに存する」として『諸考察』の交換価値論を論拠に効用と交換価値の混同を批判しているのである。(40ページ)。

第2に注目される点は需要供給にもとづく市場価格の自然価格へ一致する傾向についての『諸考察』の研究である。ここではマルサスの見解たる「供給と需要が市場価格と同じく自然価格をも規定する」という需給論[22]が批判される。その立場はスミスの自然価格論であり，そのうえで「需要供給の原理」についてつぎのように解明している。「その原理は諸物の相対価格を，各々の生産においてとえられる利潤等が，できる限り，均等化されるような状態にもたらす傾向をもっている。だがその原理はどんな状態であるかを規定するわけではない。その原理は，スミスが明快に説いているように，どこに資本等は移動しうるのか，より利得の少いところからより利得の多いところへ，という資本等の移動〔の原理〕である。どちらがより利得の多いところ**であるか**はこの原理の外にある諸原因から規定されねばならない。」と(77ページ)。需給の変動は資本や労働の移動の状態を規制する要因であり，需給を運動せしめるものはそれらとはことなるもの(自然価格を中心とする生産費)であるというこの見解は需要供給について正しい把握を示している。もちろんその基準としては自然価格を前提し，平均利潤を前提しており，現象はそのままの姿でうけとられる。価値概念を交換価値に解消したうえで立てられた生産費説であることはいうまでもない。

『諸考察』はさらにマルサスを追って市場価格の変動の状態を分析し，この点でも鋭い考察を示している。有効需要が供給を超過する場合，3つのことなる価格運動が生ずる。第1は供給量が増加しても自然価格が不変の場合，第2は供給量増加不可能の場合で，独占価格を生ぜしめる。第3は供給の増加は可能であるが従来よりも多くの生産費を必要とする場合で超過利潤(地代)を生ぜしめる。(79〜80ページ)。これら3つの場合についてはベイリーもまた説明しているところであって，主著第11章の主内容の1つを形成している。ところで『諸考察』においては供給の増大による価格の低下についてさらにつぎのような分析がなされる。「供給に対する追加，たとえば10分の1の追加は，価格を10分の1よりはるかに低落せしめるであろう。あるいは換言すれば，2つの時期の価格は2つの時期の供給量によって示される比

20) J. B. Say, *Lettres à M. Malthus.* [1820] *Mélanges et correspondance d' économie politique, publié* de J. B. Say, par Charles Comte. Paris 1833, p. 281. 中野正訳『恐慌に関する手紙』1950, 118ページ。

21) *Ibid.*, p. 276. 邦訳113ページ。

22) Th. R. Malthus, *ibid.*, p. 84. 邦訳上巻125ページ。

率ではないであろう。従来生産された量の保有者や生産者は新しい供給が新競争者をひき入れかれらの価格の低下をよぎなくされるであろうことを知り，そのような増加した供給全体が現実に生ずるまで待つことなくかれらの価格を低下せしめるように促がされるであろう。もしそれがすでに始まっているかあるいは起りそうだということをかれらがわかるとすれば，この新競争者がかれらを売りたたくと同じ原因，この新競争者がそうすることができる同じ原因が，同様にかれらをして新競争者を売りたたくように促し，またかれらはおそらくずっとよくそうすることができるであろう。(81～82ページ)。ここでは競争戦の現実が明白に把えられているのである。それはマルサスのいう想像上の供給(contigent supply)[23]であって，自由に行なわれるならば結局それは生産費と等しい，と批判がなされるのである。(82ページ)。

IV

われわれは『諸考察』をベイリーの主著と対比しつつその主要特徴をあきらかにしてきた。それを要約すればつぎのように言うことができる。

第1に『諸考察』は価値を交換価値の形態において考察し，その相対性の把握に立って不変の価値尺度論を批判する点で，ベイリーの理論の先駆的業蹟というべきである。

第2に，『諸考察』は自らの価値・価格理論において当然リカード理論の俗流化にふみ出しており，自然価格論・生産費論をその見解としている。この点でもベイリーの先駆となっていることは明らかである。

第3に，セーやマルサスの批判に当って，自らリカードやスミスの見解(もちろん『諸考察』の理解する限りの)依拠することを強調し，その点でベイリーがはるかに強くリカード攻撃の色彩をおびている[24]のとはことなっている。そしてそれはマルサスやセーの使用価値・効用論への批判やマルサスの需給論に関する詳細な批判となってあらわれている。これに対してベイリーは価値の原因について次のようにのべている，「価値とは，ひっきょうするに，何等かの対象物に対する評価を意味するように思われる。厳密に言うと，それは心に生ぜしめられた結果をさすのである。」[25] だから「諸商品の交換にさいして心に，直接あるいは間接に，挙示せられる影響を及ぼす事情はいかなるものでも，これを価値の原因と考えてよいであろう[26]。」ということとなる。『諸考察』においても価値の原因が多数であるということをのべている(53ページ)のではあるが，それは交換価値の規定には役立たないとしてそれ以上追求されておらず(53ページ)，ベイリーの示しているごとき商品の交換当事者の心における評価というような規定は与えられていないのである。

ベイリーの理論の特徴としてこの価値規定を高く評価し後の限界効用理論の重要な先駆者として再発見が行われてきた[27]。しかしそのような意味は『諸考察』における価値の規定にふくまれておらず，むしろ使用価値ないし効用(認められた価値)を拒否する見解をリカードの見解によりつつ強調している。同じく生産費説をとりながら『諸考察』からベイリーにいたる道程はいっそうリカード価値論の俗流化をすべりおちてゆくことを示しているのである。そして『諸考察』においては市場価格の運動を通しての資本の競争戦が現実的に観察され，労働力に関する需給が均衡をもたらさない矛盾をもつことが解明され(72～73ページ)さらに「剰余生産物——この表現はリカード氏によって用いられている——は，通常それを産出する労働者に帰属する部分に対する1物の総価格の超過を意味する」(74ページ)として資本家的見地を率直に表明する[28]。この意味でまた『諸考察』はより強くリカードに依存しているということができる。ここにベイリーの理論に比してのその特色がみられる。(1963. 11. 29)

---

23) *Ibid.*, p. 80. 邦訳　　ページ。

24) S. Baily, *op. cit.*,p. xii f. 邦訳18ページ以下。

25) *Ibid.*, p. 1. 邦訳27ページ。

26) *Ibid.*, pp. 182—3. 邦訳163ページ。

27) E. R. A. Seligman, "On Some Neglected British Economists," *Economic Journal*, xiii, 1903, pp. 351—355. 以来著しく示されてきた傾向である。*Cf.* R. M. Rauner, *op. cit.*, pp. 1—2, 16—17.

28) K. Marx, *Theorien*, Teil 3. ss. 112—3.